



# ヒガンバナ (彼岸花、曼珠沙華)



学校法人中部大学 監事 太田明德



ヒガンバナ科ヒガンバナ属 *Lycoris radiata*、属名 *Lycoris* (リコリス) はギリシャ神話の海の女神の名から、種小名 *radiata* は放射状に広がっている花の形からと言う。英語では *red spider lily* と言うとあった。

ヒガンバナ属の分布は照葉樹林帯と重なる。ヒガンバナの原産地は中国で、記紀には記載がないらしく、いつ渡来したものか分からないらしい。9月頃に地下の鱗茎から花茎を伸ばし、頂端に鮮やかな赤い花を輪状につける。花の後に葉を成長させると言う、不思議

な生態である。中部大学では「ちゅとらのお家」に降りる坂で見かけた。

京都府亀岡の某大学の教授を尋ねたときに、車窓から田の畔に群れ咲くヒガンバナが見え、印象的であった。他の地域でも群生地が秋の観光資源となっているようである。古来、ヒガンバナは、含有する毒性のアルカロイドによって田の畔がノネズミやモグラの巣となることを防ぎ、畦の他の植物の成長を抑えるアレロパシーの効果もあって、稲田を守っていたのだろう。また、鱗茎のデンプンは毒抜きすれば救荒時の食糧になり、そのアルカロイドには鎮咳去痰と鎮痛などの薬効があると言うのであるから、ヒガンバナは有用な植物であったに違いない。狭い盆地ながら都の近くの土地柄で、古くから利用されていたと思われた。

日本列島に繁殖しているヒガンバナの染色体は3倍体であり、不稔と言う。とすれば、人が大なり小なり繁殖を助

けてきたことになる。勝手な想像であるが、かつて日本では赤色が邪気を払うと信ぜられたこともあって、墓を守り、先祖を祀るお彼岸の花としても植え継がれてきたと思われる。そう言えば、地中から唐突に花茎だけを伸ばして咲き、長いおしべを突き出す花の形も異形の力を思わせる。

なお、含有されるアルカロイドの一つガラントミンは神経伝達物質の一つであるアセチルコリンの分解を阻害し、アルツハイマー認知症進行の抑制に用いられると言う。

駄句二つ。

畦に咲くアカレンジャー曼珠沙華  
色はこれ目に滲みるほど曼珠沙華

参考)

- ・朝日百科「植物の世界」、第10巻、10-55、朝日新聞社1997
- ・「花と樹の大辞典」木村陽二郎監修、p376、柏書房1996
- ・Wikipedia、「ヒガンバナ」